心理臨床場面において生起するセラピストのヴィジョンに関する一考察

小山　智朗

Ⅰ．はじめに

ヴィジョンとは、「印象的、個人的な体験として、視覚的、絵画的に意識の領野にもたらされる、なんらかの無意識内容の侵入」と定義され、睡眠中に見られる夢とは異なり「人が目覚めているときに生じ」るもので、またある種のヴィジョンはそれを受けた個人に「忘れ去れないほどの印象を与える」とされる（Samuels,1986）。

イメージとの違いとしては、イメージが一般に内部的・主観的空間に現われ、浮動的で意志によって左右されるのであるのに対し、ヴィジョンは外部的･客観的空間に現われ、意志によって左右されにくい性質を有している。ヴィジョンは視覚的リアリティや実体性を伴っており、本論で詳述する筆者のヴィジョンにおいても、畏怖や魅惑を伴うヌミノース体験に通底する圧倒的な体験であり、「イメージ」という概念では正確に言い表すことができないと考えている。

具体的に換言すれば、ヴィジョンは「意識覚醒時に生じる視覚的体験」と言え、本稿では内的に生じるイメージやファンタジー体験や睡眠時に見られる夢とは別のものとして考えていく。疾病による特殊な状態下のみならず、ある条件下におかれると（瞑想、宗教的体験、シャーマンの修行体験、遭難時など）誰でもヴィジョン類似の体験をしていると思われる。

ユングは様々なヴィジョンがクライエントの変容に結びつくことを論じ、ヴィジョンを重要視してきた（Jung, 1997）。ユング自身のヴィジョンとしても、フィレモンと名付けた異教の老賢者的な像のヴィジョンが、ユングの導きの糸になったことはよく知られている（Jung, 1963）。フィレモンのヴィジョンは、ユングの内的危機を救い、また個人神話を紡いでいく上できわめて大きな役割を果たしてきたと思われる。

ユング（1916）は夢と比較して、以下のように述べている。夢は睡眠中のものだから、エネルギー緊張が弱く、論理の不整合や飛躍、意味のない結びつきや混淆が生じる。それは無意識内容の表出としては有用ではあるけれども、意味内容に比べれば劣った表現だから、そのときの心的活動の目的を理解するのが容易でない。だから、もっとエネルギー緊張の強い、秩序とドラマ性と意味関連の明瞭な素材を求めたい、と。こうしたユングの指摘からも、エネルギー緊張が強く、覚醒時に生じるヴィジョンについて検討することは意味が大きいと思われる。

しかし、セラピストの夢に関してはこれまで数多の研究がなされてきたにもかかわらず、ヴィジョンに関してはその重要性に見合った知見が積み上げられてきたとは言い難い。これまで心理臨床場面においてセラピストに生起したヴィジョンを積極的に扱ったものとしては、織田（1998）を除いて殆ど見られない。これはヴィジョンが主観的なものとみなされ、客観的に接

近することが困難で、時に幻覚体験と混同される傾向もあるためと思われる。ヴィジョンを扱うにあたっては、「ある」「ない」といった二項対立的な枠組みで実在性を検証することに関心がもたれるかもしれない。しかし、本稿は実在性を検証するのではなく、心理臨床場面でセラピストに生起するヴィジョンについて検討を加え、ヴィジョンがどのような機能や臨床的意味を有するかについて検討することを目的とする。

Ⅱ．セラピストの個人的問題を超えて

ただ、こうした実在性を帯びるヴィジョンに対しては、精神病理学の枠組みが援用され「幻覚」「幻視」といった概念で説明されることも少なくない。ただ､そうしたヴィジョンを「幻覚」と呼べば、直ちに病理的なものとして意味づけされ、無価値なものと捉えられてしまう傾向にないだろうか。

ヴィジョンが病的体験であるか否かについて検討することはもちろん重要である。ただ、セラピストに生じるヴィジョンに関して精神病理学の枠組みを援用するだけで事足れりとするのでは、体験を矮小化し、その本質を見落としてしまう可能性があるのではないだろうか。統合失調症とよく似た症状を呈する高名な宗教的教祖が散見されたことや、宗教的修行において幻覚妄想様の状態が生じることはよく知られている。だからといって、その宗教的体験の価値が貶められることはないように、病理学的位置づけと体験の本質的意味は、そもそも全く別の次元にあるのではないだろうか。

また仮に本稿で述べるヴィジョンが病的な性質を帯びているとしよう。しかし､河合（1994）は患者は患者、治療者は治療者となってしまい患者自身の治療者元型のはたらきを阻害しないためにも、「治療者が自分のなかに存在する患者を認識することが必要」と述べる。また角野（1998）も、セラピストに出現してくる内的な病者イメージに気付き、発展させていくことの重要性を述べている。ヴィジョンを通して自分の痛みを自覚できることで、Wounded healer（傷ついた治療者）として心理療法を展開できる可能性に開かれていると思われる。

さらに、ヴィジョンは「内的な問題の投影に過ぎない」という見方もあるだろう。とりわけ精神分析においては、精神分析の枠組みに則って、ヴィジョンそのものを深めるのではなく、セラピスト個人の無意識的意図や個人的関係（転移、逆転移関係）に現象を還元して扱っていくと思われる。しかし、そうした視点では、個人に還元し得ない現象や動きがあっても、それを認めず排除することもあるように思える。また現象が持つ意味が、時に弱められてしまう印象も筆者は受ける。

加藤（1996）は「不思議の出来事があることは疑いない。ただそれは、近代の学問の範形ではつかめないだろうし、『ある』の意味そのものをも、少し考え直さねばならぬかもしれない」と述べている。さらに「行中や瞑想や催眠下で起こる変性意識状態での出来事、あるいは病的幻覚でさえも、ただ内面イメージの投影とのみ見ることは許されないであろう」と断じ、「この世の深みやあの世のありさまを詳らかに語る備えをも、これからの心理療法は持たねばなるまい」と心理療法の進む方向性を指摘している。こうした指摘からも、そうしたヴィジョンをセラピストの幻覚や内的問題の投影であるということで片付けてしまうのではなく、事例を通

してヴィジョンがはらみ持つ意味について検討することは重要であると考える。以下、事例に沿って検討してみたい。

Ⅲ．事例に沿って

以下にあげる３つの事例では、いずれも実際の面接場面で筆者にヴィジョンが起こり、変容の大きな契機になっていると思われる。

山川（2008）は「セッションすべてを短縮して提示するより、一つのセッションで生じているダイナミズムを詳細に描き出す方が、主観性と客観性が交錯する臨床の現場により近い論述ができるのではないか」と指摘している。本稿でも、セラピストにヴィジョンが生じたセッションを中心に詳細に事例場面を提示することで、ヴィジョンについて検討していきたい。

事例１　織田（1998）が記載している事例である。クライエントは30代後半の女性。変化の激しい抑うつ、自殺念慮、さらには神経性過食症や慢性便秘というような心身症状に苦しんでいた。面接開始３年半後には慢性便秘は解消し、その他の症状も軽くなっていたが、分裂や投影同一化という防衛は依然として活発であった。電話による症状の訴えに治療者が料金を請求したのを契機に、患者は治療者に直接激しく怒りを向け、「もう一切面接には来ない」と宣言した。この治療段階ではなお、患者の心の中の治療者イメージは、共感的になったり拒否的になったりして相当急激に揺れ動いていた。治療者である織田は、患者に対して相当激しい怒りを感じる。そのとき、織田は患者と自分との中間の領域に蛇の姿を見る。その蛇を男性がナイフを用いて切断していたのだ。

その後の面接で、想像の中で怒りの気持ちをもって治療者が蛇の切断を繰り返していると、イライラした感情を伴う怒りの気持ちが軽くなり、楽になっていった。

織田は、怒りの意識化という文脈でこの事例を読み解き、このヴィジョンを通して、治療者が自らの怒りに心を開き同時的に患者が怒りを心理化できる契機となったとしている。本論の文脈で重要なのは、セラピストに生じるヴィジョンが治療的転機となったと述べられていることである。織田がヴィジョンを単に個人的な問題などとして切り捨てるのではなく、ヴィジョンの治療的意味を重視していることを、まずしっかり踏まえておきたい。

この事例では、クライエントの激しい怒りに対するセラピストの怒りに焦点が当たり、またセラピストのヴィジョンへの積極的な関与の重要性が指摘されている。続いてセラピストの感情体験としては哀しみが前面に立ち、セラピストの受身性が意味をもったと考えられる自験例を２つ挙げてみたい。

事例２　クライエントは30代の女性Ａ。息子のＢ男（中１）の不登校を主訴に来談。

＃１：地味な色合いの服装。雰囲気は堅い。口を開くなり、学校によるＢ男の受け入れ態勢の不備を激しく非難していく。下からギロリと筆者を睨みつけ、筆者はまるで学校関係者であるかのように責められる印象。「学校から放ったままにされている」といった学校非難が30分

ほど激しくなされていく。

B男については、初めは「繊細」「感受性が豊か」で、「B男の不登校は学校による対応の不備のせい」と学校非難をしていたが、「(B男は) 精神的にモロい」といった否定的な表現が初めて出てくる。こうした否定的な語りにおいては、B男のことなのかAなのか、主語が定かではなくなる。そのうち、「不登校になったのは自分が言い過ぎたかもしれない」と自分の対応への言及が一瞬なされ、しかしすぐに「その原因は主人です」と、Faの批判に転じていく。また暫くすると、「B男が学校に行かないと、気持ちがもやもやとくすぶってくる」「気が重くなる」と自らの情緒に触れ、さらに「だめと思うけど、つい学校に行けって言ってしまう」と自らのあり方の自省へと転じていく。

このように、筆者が語りに没入していく姿勢でいると、初めは頑として動かなかった学校批判への思いはA自身やB男、Faへとその矛先を変え、また様々な思いが撹拌されるように語られていった。

＃2：真っ赤な服で来所。身なりの落差に驚く。B男への怒りが激しく語られていく。その後筆者がヴィジョンを見た面接場面を示す。

> 私は必死の思いでB男を心配しているのに。私は色々してやってるのに、あの子は学校を休む。＜そこまでやってるのに！って＞もうハラワタが煮えくり返るっていうか。＜煮えくり返るんですね＞そうですよ！B男に何を言っても反省が見えない。
>
> 車を運転してて、もうどうしていいか分からなくなって、車でこのまま壁にでも突っ込みたいとか思いますよ。・・・(暫く沈黙)・・・私の人生何も良いことがない。B男に私の人生引っ張られてる、引っ掻き回されてる！＜引っ掻き回されてる＞そうです！
>
> こんだけ頑張ってるのに。家のことも私一人がやってる。＜重荷を一人で＞そうです。1人で全部やってる感じですね。私も一人でいろんなことが全部かぶさって、どうしていいか分からない。協力してくれればいいのに。全然ですね。一日家にいて、ぼーって漫画、テレビ、昼寝。何も考えてないですわ。
>
> ・・・B男を産まなければって思いますよ。生まなければ良かった。こんな風になるんだったら。

こうした語りの最中、筆者は赤い服と相まって老婆が燃えているヴィジョンを見る。体感としても顔が熱く火照り、実際に熱さを感じる。筆者はヴィジョンに対して、燃えているAから目を逸らすのではなく、じっと見つめていこうとする姿勢をとる。面接終了後、B男担当のセラピストに筆者の顔が真っ赤に火照っていると指摘を受けるなど、他者の目からも変化が見られたほどで、疲労困憊するセッションであった。

このようにB男への非難が圧倒的迫力をもってなされ、前回の「もやもやくすぶっている思い」が文字通り燃えるように語られる。それを受けとめていると、「このまま車で突っ込みたい」という死にたさや「人生いいことがない」といった報われない哀しみに開かれ、同時にB男への恨みやB男を生まなければよかったという思いまでもが語られていく。

＃3：薄い色合いの服で来所。まず、担任がB男に登校を促す連絡をくれたことから語り始める。「ほったらかしにされてないってことが分かった。本人も嬉しかったと思う」。学校への思いも

「～先生はダメだけど、～先生はやってくれた」と全面否定から部分否定となり、受け入れてくれる存在もいることが語られる。

また「B男は、『自分で教室に行くかどうか決める』って言う。やっぱり別室登校とは違うんだな。教室って大勢がいて」とB男の内面を慮り、気持ちを汲んだ上での語りがなされる。

続いて「B男の勉強を見てやらないと、と思うんですけど、でも私も仕事を終えてからで眠たくなるし」「中学の勉強分からないですし」と初めて笑みを見せる。＃２の前半のようにB男は弱いと非難するのではなく、A自身も弱みや欠点をもった存在として位置付けていく。

しかし、やはりFaに対し「こうなったのも原因があるわけですし。全然勉強も見ないし、話さない。親らしいことしてない。」といった不満が語られる。

そうした語りを受け入れていくと再び転じ、自らの内面の弱みに照らして、B男の内面を理解しようとする動きが生じてくる。「私だって仕事がしんどいときがある。気分が乗らなくて。まだ給料がもらえるっていうのがあるから行きますけど」「仕事が楽しくて仕方ないっていう人もいるかもしれない（笑）。でも、私はそうじゃない」「私も全然完璧な親ではないからそう思う。行きたくないけど給料もらえるから行くだけで。子どもはそういうのがないから行きづらい」と、B男の気持ちに共感する動きがさらに強まっていく。

Aの印象も、前回までに比べ若々しく、女性らしい柔らかさが出てくる。＃１、２では全くなかった笑いも生じる。「もう、B男は情けない」と言いつつも、親子の情愛や暖かい感情が感じられる。

＃４以降：B男、学校、Faの批判を中心にしつつも、＃２ほどの激しさは薄れていく。また、これまでAに対して全く口答えしなかったB男が不満を述べるようになる。それに対しても、「B男が私の言うことに何でも言い返してくる」（#10）と、どこか楽しげに語り、B男との関わりにゆとりが感じられる。

現実の変化として、B男は数カ月後から登校するようになる。Aも仕事にしゃかりきになるばかりではなく、趣味も楽しむようになる。「ファッションばかりにうつつを抜かしている」とB男の批判をしていたが、A自身の服装も柔らかなパステル調の洒落たものへと変化する。

事例３　クライエントは20代の女性C。D男（小１）の万引きを主訴として来談。

＃１：これまでD男の万引きや反抗的な態度などの「悪事」を時系列に則って整然と報告していく。全体に笑みを湛えて語るのだが、それはD男が可愛くてというより、距離を取っている印象を受ける。Cの情緒は語られず、D男の行動を高みから冷静に、しかし辛辣に分析するような語り方。「妹に比べてD男は本能の我慢ができない」と何度も語る。躾はきっちりしているが、あまりに厳しく、D男との関わりに遊び感や余裕が全くない印象。

＃２:「妹と違ってD男は悪賢い」「目を離すといつでも盗もうと計画している」などと語るが、やはり激しく怒ることはなく、笑顔も多い。そうした語りのあと、ふと「ただ、優しいところもある。妹や友達には大丈夫って言ったり。でも私にはどこか不信があるんだと思う・・・D男にとって私は何なんだろう」「D男にとって私はご飯を作るだけなのか？」「裏切られ、落ち

込むことも多いです」と語る。さらに「D男には悲しみの感情はないんじゃないか」「D男は泣いたこととかない。口惜しくて泣くのはあるけど、それ以外はない」と初めてD男との関わりの中でのCの哀しみが伝わってくる。この辺りは、初めてCの実感が伴い、筆者にもCの痛みや辛い思いが伝わってくる。

＃3：初めから、分析的で冷静に指摘をする感じではなく、激しく怒っていく。「盗みをしたのできつく叱った。でも自分からなかなか謝らない」「先生にもひどいこと言う。私の言うことも聞かない。反抗的」「楽しさばかりを追いかけてる。その場のことしか考えてない」。尚も「D男は後悔しない」「悪いと思わない」といった否定的な語りが暫く続く。しかし、ふと「でも、他の子もそんなものかな」とD男の状態が他の子と同じ程度で、否定的な意味での特別さはないという語りがなされる。しかし再び「嘘ばかり」とD男を信用できないという語りに戻っていく。ただ最後には「D男は私のこと信頼していない。盗みの背景にはそれがある」「普通は、お母さんに心配かけたらあかんって行動を控えるのに」とD男と信頼関係で結ばれていないことへの哀しみにも触れていく。距離をとるような笑いは少なくなってくる。

＃4：筆者がヴィジョンを体験したセッション。

「言い聞かせても全然言うことを聞かない」「習い事に行かない」「何度言っても約束を守らない」「やりたいことだけをやって義務をしない」「その場しのぎの嘘をつく」「我慢できない」「心が弱い」とまくし立てるようにD男を激しく非難していく。まるで筆者がD男であるかのように、筆者を睨みつけ辛辣に語っていく。こうしたD男への怒りの渦中にあるとき、筆者は『Cの顔が胴体を残して飛んできて、筆者の首に噛み付いてくる』というヴィジョンを見る。筆者は、そうしたヴィジョンの最中は怖気を覚え死の不安さえ感じる。しかし、CがD男に対しそうした見方をせざるを得ないことへの哀しみも感じ、ヴィジョンに対して逃げずに身を差し出すような決意でその体験過程に留まっていく。どのくらい時がたった頃か、ヴィジョンは消失し、すっと首が身体に納まる。D男への否定的な思いを浴びせかけるようだった語りも穏やかなものとなる。

このヴィジョンの後の語りでは、本能の歯止めが効かないというニュアンスではなく「やりたいことが一杯あるから目移りしてしまうのだと思う」とD男の内面に照らした理解がなされる。また「昔妹の入院のとき、十分D男のことを見てやれなかった。それで荒れて盗みをするようになったのではないか」と、自らの関わりが不十分であったことへの反省の思いが語られる。また「甘えるけど、私にどっか遠慮してますね」とつながりが感じられない状況への哀しみも語られる。またD男への見方が変質し「かわいいところもある」「習い事の先生もかわいがってくれる」と肯定的な見方が出てくる。

＃5：やはり初めは本能のままに動くとD男への非難から始まるが、やがて「どう接したらいいのか」というCの関わりの上での不安、自信のなさが語られる。続いて、D男が甘えてくるようになったエピソードが登場し「D男も人間らしいというか。寝るときに、手を握ってきたりする」と嬉しそうに語る。また、叱られて暫くCに近付いてこないのも、「悪いと思っ

ているけど、バツが悪くて来れなくて」「来たいけど来れば叱られるし」「段々淋しくなるのだろうな」と、D男の内面に細やかに寄り添っていく。この後再びD男への不満を語るが、＃4までほどの苛烈な質ではなくなっている。全体に凄く穏やかな表情で、笑顔もD男への情愛が伝わってくる質のものとなる。

＃6以降も、D男は「人間味がある」「妹よりエネルギーがある」「粗野だけど力強さがある」と見直すような発言が少しずつ増えていく。もちろん、D男への辛辣な非難は完全に収まったわけではなく、面接を通じて数限りなく繰り返されたが、＃4ほどの苛烈なものはなかった。その後も螺旋を描くような過程を経ながら、D男への信頼感や情愛が着実に増していき、D男への肯定的な意味づけが増えていくような過程を辿った。それと並行するようにCも活気が出て、生活や子育てを楽しむ余裕感が出てくるという変化が生じる。

Ⅳ．考　　察

河合（1988a）は、セラピストがクライエントの夢を見るのは、「治療の過程が、治療者によって意識的によく把握されているときは、それに関して夢を見ることは、あまりないものである」としている。夢と同様に、ヴィジョンについても、無意識からのメッセージを意識水準で受けとめ損ねているために、ヴィジョンが生じている可能性について常に心に留めておかねばならないだろう。

ただ河合（1988b）は、それゆえ夢体験に意味がないと捨てさるのではなく、無意識からのメッセージに対する「意識的検討を何らかの形で必要としている、と見るべき」と述べる。こうした指摘からも、ヴィジョンが何を表し、どういった働きをしているかについて意識的検討を加えていくことは意味が深いと考える。そもそも筆者は面接中にヴィジョンを見ることは殆どないため、これらの事例特有の問題が大きいと考えられる。3つの事例では、事例1に代表されるように境界例水準にも近い心性が見てとれ、激しい怒りがテーマとなっている。ヴィジョンには様々な内容があるだろうが、この3事例は多様なヴィジョンを網羅しているわけではなく、怒りが前面に立ったヴィジョンである。

本稿においては、3つのヴィジョンから抽出される特徴や臨床的な意味について検討していきたい。そこで、まずヴィジョンが生じるに至った面接過程を整理してみよう。

1．自我と無意識の弁証法的な動きとしての面接プロセス

筆者が、たとえ、否定的な思いや怒りが吐露されてもそれに付いていくことに努めていくと、事例2では、学校批判というスタンスで「安定」していたAのありようは、様々な内面の動きがせめぎ合うような「不安定」なものへとなっていく。B男への不満、B男への否定的な「精神的にモロい」といった語りが、AなのかB男なのか主語が入り混じる、つまりA自身の問題とB男の問題を相当重ね合わせた語りを経て、一瞬A自身の子育ての反省に転じる。それはすぐさまFaへの不満へと流れていくが、再度AはB男が家にいることで「もやもやとくすぶってくる」思いを体験する。その上で、「つい学校に行けって言ってしまう」という反省を述べる。このような展開の中で、他責―自責、怒り－哀しみ、信頼―不信といった様々な二

つの要素の両極を激しく動くようになっていく。

また事例３では、Ｃの関わりは確かに知性的で冷静ではあるのだが、それは他人に接するように距離を取った分析的な態度であり、自らの奥底の哀しみや不安、そして怒りさえも切り離して感じないようにしていたと思われる。そうしたあり方により、Ｄ男に象徴されるような柔軟さや本能的エネルギーに満ちた面を影の問題として、実際以上にＤ男に否定的な見方をするようになったとも考えられる。しかし、＃２でＤ男に信頼されていない哀しみを感じ、これまで抑圧してきた思いが競り上がってくると、＃３ではその思いを強い力で抑え込むかのように、激しい怒りが生じてくる。そして、再び信頼されていない哀しみに触れるなど、怒り－哀しみ、愛―憎の両極を激しく揺れ動いていく。Ｄ男に対する見方も、肯定―否定の極で揺れていく。

こうしたあり方は、二極のそれぞれの要素を認める⇔認めないという意味で対立的な動きがあり、自我と無意識の間で激しくせめぎ合いが生じ、すぐれて自我と無意識の間の弁証法的関係が生じていると言える。このように、セラピストが片側の極に肩入れしたり、方向づけをしたりするのではなく、両極の思いを十全に展開させていくことで、両極の二要素の間を揺れるパラドキシカルな動きが生じている。しかしこうした状態は、従来の価値観が突き崩されて、内的な緊張が非常に高まっている不安定な状態であり、このままでは危機的であるとも言える。

そうした極期に、いよいよセラピストにヴィジョンが生起する。

事例１においては、織田（1998）によれば「患者の心の中の治療者イメージは、共感的になったり拒否的になったりして相当急激に揺れ動いていた」（傍線部筆者）状態であった。

事例２では、前回の「もやもやくすぶっている思い」とは対照的に燃え盛るように激しく非難がなされる。ここで筆者はヴィジョンを見る。ここでは確かに一刀両断に切り捨てるように怒りや他責が前面に出る語りがなされるものの、先述したようにその対極にある哀しみや自責も競り上がってきている時であった。実際、その後再び「人生いいことがない」といった哀しみや、死にたいという究極の自責の思いも出てくるなど、両極の対立がピークに達していた瞬間であると言える。

事例３においても、やはりＤ男への激しい怒りが生じている。それは遠いところにＤ男を置き分析していくというものではなく、怒りの只中を生きるような質のものである。怒りの背後には、哀しみが布置していることは先ほど触れた通りであり、ＣはＤ男を切って返す刀で自らを切りつけているような状態であったと思われる。そうしたありようを受け、筆者は首に噛みつかれるというヴィジョンに対しても、怒りではなく深く哀しみを感じたと思われる。

こうして見ると、セラピストにヴィジョンが生じた局面では、クライエントに単に「怒り」「否定」「他責」といった要素への一方向の動きだけがあるわけではない。また怒りも中途半端ではなく全人的とも言える激しさや強度で生じている。３事例とも、クライエントの内界において双極へしかも激しく引き裂かれるような動きが見てとれる。筆者は両方向への激しい揺れを可能な限り同行するような姿勢でいたが、内的にはポジと思えばネガに突き落とされ、クライエントに対する怒りと哀しみ、肯定と否定といった相克を体験し、常に両極へ揺さぶられ引き裂かれ続ける状態である。クライエントの内的な動きに曝され、セラピストも同型的なパラ

ドックスを生きていると言えるだろう。

このようにパラドックスに曝され続けると、セラピストの因果律的な世界の枠組みが混乱し通常の意識状態が揺らいでくる。そして通常の意識状態が一種の変性意識状態とでも言えるものへと変化し、そこでヴィジョンが生じるのだと考えられる。これは河合（1989）の述べる「クライエントの語る内容をあたかも夢を聞いているかのような態度で聞く」といった意識状態に相当すると思われる。

このようにクライエントの自我と無意識の弁証法的な動きがまさにその極期にあるとき、そうした激しい動きにセラピストも曝されて、即応的にセラピストに同型の矛盾をはらんだヴィジョンが現われている（矛盾をはらんでいるという点に関しては、次稿で詳述する）。ユング（1960）は、超越機能について「自我と無意識の対決」を通して「対立する二要素の間」から、止揚された第三のものを生み出す」機能であるとしている。ここで「第三のもの」とは象徴である。クライエントが二要素間の対立する動きに引き裂かれそうな極みで、その動きに共感的についていくセラピストも同型あるいは相補的に対立を生きることになる。その対立をつなぐセラピストの内的な動きとしてヴィジョンが表れたと捉えるなら、セラピストに生じたヴィジョンはすぐれて象徴であると言えるだろう。

２．ヴィジョンの機能

①　対立をつなぐ ― 混沌を生む ―

これまでいずれの事例においても、セラピストにヴィジョンが生起しているのは、クライエントの自我と無意識の弁証法的な動きがピークに達し、パラドックスに曝されたセラピストの因果律的な世界が混乱し、通常の意識状態から変化した時である。それでは、こうしたヴィジョンにはどういった働きがあるのかを検討したい。

事例２のヴィジョンでは、Ａが自死を思わせるかのように自らを炎で焼きつつ、Ｂ男について激しく非難するという、自と他の逆方向に怒りが向かうというパラドックスがある。また生気のない老婆と情熱を表す真っ赤な炎という対立も表されている。火自体も破壊性と創造性、死と不滅性といった両義的な性格を併せ持っている。事例３においては、Ｃの頭が飛んできて噛みつかれたのは筆者でもあるが、まるでＤ男に対して直接ぶつけるように語られているところから、Ｃの中では筆者とＤ男のイメージは重なっていたと考えられる。筆者、いわばＤ男に噛みついてくるという動きは、Ａの他者と距離を取るあり方ではなく、合一するほどの近さであり、結合である。河合俊（2000）は、「殺害、解体は憎しみや敵対ではなくて、むしろ最高の愛を示している」と述べている。噛みつくヴィジョンには、憎しみのみならず究極のコミットである愛が凝縮した形で表わされていると思われる。また飛んでくる首の激しい怒りとヴィジョンに組み込まれた筆者に生じた哀しみ、つながりと切断という具合に、幾重にも入れ子のようにパラドックスが織り込まれていると思われる。

事例１でも無意識を表象する蛇と自我を表象する剣も両義的であり、また殺害することでコミットするという点では、事例３と同じパラドキシカルな動きが凝縮した形で認められる。いずれのヴィジョンにおいても、矛盾をはらんだ力動が集約的に示されている。さらに静止画的なものではなく動画的であり、クライエントの自我と無意識の弁証法的な動きと同型の動きが、

セラピストのヴィジョンの中に生々しい動きを失わないまま象徴として対立をつなぐように結晶化されていると思われる。

②　新たな分節線を引く ― 混沌を切る ―

事例を今一度見ていくと、ヴィジョンには対立をつなぐ以外にもう１つ大きな特徴があると思われる。それは死のモチーフに象徴されるものである。事例１では織田が剣で蛇を切り裂いていく、事例２ではクライエントが火に包まれて燃える、事例３においては筆者の首が噛み切られるようなヴィジョンを見ている。

そうした死のモチーフには、何が底流しているのかを考える上で、井筒（1991）の考えを見ておこう。井筒は、東洋哲学の観点から意識と事物の本質について論じる中で、日常の経験的世界にある「分節（Ⅰ）」が、一旦「無分節」というカオスを経由することで、「分節（Ⅱ）」という新たな意味づけをおこなう様態へと進むとしている。「無分節」の位相にあっては、事実性から遊離したイマージュが現われ、そうしたイマージュこそが「存在を表層意識のそれとは全然別の原理で分節する」と述べる。そうした位相での分節こそが、「一次的分節」で根本的であり、「表層意識の面で見る事物の分節は、深層での第一次的分節の結果」に過ぎないとしている。本稿の文脈に引きつけて考えるなら、「私」という分節や意味付けをおこなう秩序体系が変化するためには、一旦混沌状態を経て、そこでヴィジョン（井筒の言葉ではイマージュ）が生じるような位相に進むことが必要で、それにより新たな「私」への可能性が開かれると言えるだろう。

こう見てくると、死のモチーフが現われている背景として、まず３事例ともヴィジョンの生じたセッションは、いわばこれまでの分節や意味付けが混乱に陥っている状態があると思われる。これは井筒の言う「分節（Ⅰ）」から「無分節」への移行に相当すると考えられる。両義的なものが１つに凝縮しているというのは、二項対立的な要素が一つに固められた、いわば混沌を具現化したような位相にある。すっきりと二項対立的に物事を把握していく「私」からすると、全く「私」が機能しないわけで、端的に死として捉えられるだろう。

背景のもう１つは、井筒の言葉を借りると「無分節」から「分節（Ⅱ）」への移行と重なるものである。先述した「対立するものをつなぐ」という点とは逆で、クライエントの内的な動きには、そうした両義性や混沌を切り裂いていく動きがあるのではないだろうか。切り裂き、バラバラにしていくという死を彷彿させるセラピストのヴィジョンは、そうした分節線を引く（端的に言うと混沌を死に至らしめ、新たな「私」を生み出す）クライエントの内的な動きに即応して表れていると言えないだろうか。

このように、ヴィジョンはクライエントの両義性をつなぎ混沌を招き入れる働きだけでなく、同時的に両義性を切りさき、新たに分節線を引くような働きもはらんでいる。クライエントのそうしたプロセスに即応して、セラピストのヴィジョンは死を孕んだものとしてぎりぎりの形で表象されているのではないだろうか。

さて、こうした論を踏まえた上で、ヴィジョンがどのような臨床的意味を持つのかを検討したい。

３．ヴィジョンの臨床的意味

①　クライエントの内的世界への通路として

ヴィジョンを通して、筆者は意識的には捉えられなかったクライエントの内的世界を理解していく上で大きな助けを得たと感じている。この要因について考えてみたい。

まず、クライエントの理解にあたって視覚的リアリティをもって知覚できたことが大きいと思われる。クライエントの内的世界の表現において、言語による語りでは時系列に則って線状に表わされるのに対し、ヴィジョンでは集約した形で表わされる。覚醒した状態で、集約されたものを、しかも直接的に見れることにヴィジョンの大きな臨床的意味がある。とりわけ事例で挙げたような、展開点にあり、愛―憎など矛盾を激しく動くクライエントの内的世界を理解していく上では、「静止画的」なイメージより、生々しい動きを含んだ「動画的な」ヴィジョンとして知覚できたことは意味が深い。また先述した、これまでの「私」の死というクライエントのプロセスを理解するにあたっても同様の意味を持つだろう。このように、展開局面において生じるセラピストのヴィジョンは､クライエント理解の１つの道筋を示すものと思われる。ヴィジョンを通して、意識的な枠組みでは捉えきれなかったクライエントの内的な動きを、１つの表象として捉えられる可能性があると言える。

しかし、いくらヴィジョンが直接的に内的世界の理解につながる優れた通路であると強調したとしても、そもそもそれが表すものがクライエントの内界ではなくセラピストの内界の投影に過ぎないという批判もあるだろうし、その可能性を否定することはできない。紙幅の関係もありその点に関しては深くは立ち入らないが、筆者はセラピストの内界の投影であるから全く意味がないとは言えないと考えている。そもそも井筒（1991）は、通常の意識が捉える明確な輪郭線で区切られた対象世界とは異なり、事物への対象指向性を朦朧化させた「眺め」の意識で捉える世界では、却って事物がその「本質」を明らかにすると述べている。また、表層の意識からすると事実性から遊離したイマージュも、深層の意識の立場から見れば、真の意味での現実であり、存在真相の自己顕現なのであると述べる。

ヴィジョンがセラピストの投影でなく、クライエントの「存在真相の自己顕現」と無反省に結びつけるのは論外である。ただヴィジョンについて、クライエントの「本質」を表わしているという視点に開かれていることで、クライエントへの共感的理解を深めていく一助となるのではないだろうか。

②　抱える容器としての意味

ｉ．体験を生きることから

理解というところから一歩進んで述べるなら、ヴィジョンは、それを通してクライエントにコミットし、抱える容器として機能する可能性もあるのではないだろうか。

河合（1988a）は、「自分の日常的経験や、意識的努力によっては、まず共感できないことを夢体験によって体験できることは素晴らしいことである」と述べ、セラピストが自身の夢を通して、クライエントの体験を追体験できる可能性について述べている。しかし、夢はあくまで面接室外で生じるものであり、セラピストの意識的な関与が極めて限られているとも言える。先述のユング（1916）の指摘に従えば、ヴィジョンは夢に比べエネルギー緊張が強く、「秩序

とドラマ性と意味関連な明瞭な素材」なのである。ヴィジョンは面接室でクライエントと直接対峙している際に生じ、そこにセラピストが意識的に関与できる可能性も大きい。また弁証法的な動きで緊張をはらみ、対立を統合し、さらに新たな分節をするという動きを孕んでおり、よりクライエントを「生きた姿」として抱えていくことに開かれていると言えるだろう。

ここで、「生きた姿」としてクライエントを抱えていくセラピストの態度について考えてみよう。「ヴィジョンを見ることに特別な利点があるわけではない」「ヴィジョンの価値は、それを受けた人が、そこにどのような態度をもって臨むかにかかっている」（Samuels,1986）とあるように、どのような態度でヴィジョンを体験していくかが大きな鍵となってくる。

それを考える上で、河合（2000）の考えは示唆に富む。河合は、イメージのもたらした無意識のはたらきを、どれほど自分のものとして体験していこうとするか、その姿勢の重要性を「イメージを生きること」という言葉で示している。さらに角野（1998）は、「治療者が患者のそばに座っていると、絶えず患者から刺激されたと思われるいろいろなイメージが次々現れる」「そのイメージを治療者は自ら引き受け、高めるのである。」「シャーマンは患者から直接病いの霊を受け取ると言われるが、治療者は自らのイメージを通して患者の病いを引き受けるのである」と述べる。ヴィジョン（角野の表現ではイメージ）が登場するのを前提とし、さらにヴィジョンを治療的に生かすためには、実体的なものとして引き受けていく重要性を指摘している。織田（1998）が「想像力が実体的である場合、想像内容はその象徴機能によって、心の乖離や分裂を統合する」と、ヴィジョンに実体性を持たせ、クライエントを抱えていく重要性について指摘しているのもこの点を指していると考えられる。ヴィジョンを実体的なものにするには、単に受身的に見るのではなく、主体的に生きていくことが重要である。そうした主体性は、ヴィジョンの最中にアクティブな行動を起こすだけに限定されず、「『どのようなヴィジョンであっても目をそむけず受けとめる』というあり方を主体的に選ぶ」という態度も含まれると考える。

ii．死を生きることから

これまでと逆のことを述べるようだが、ヴィジョンをより生きたものにしていくためには、ヴィジョンの中の死をセラピストはしっかり体験し、受けとめる必要があるのではないか。事例１は、蛇を殺していくという主体的な姿勢、事例２では、燃えているＡのすぐ傍から離れず炎を引き受けていくという姿勢、さらに事例３では、Ｃの首が飛んできて筆者の首に噛み付いてこられるが、身を差し出す覚悟で留まるという姿勢をとっている。これらは、死を喚起する体験の中にもセラピストが主体的に入っていこうというものであった。

こうした姿勢の重要性は、数多の臨床家によって強調されるところである。川嵜（2001）「ある意味で凍結されていたといえるクライエントの傷は、クライエント―治療者間の関係性において解凍されて生き生きとした血の滴る傷になっていなければならない」と述べ、関係性の中で血の滴る領域を「生きていく」ことの大切さを述べる。また織田（2000）は、セラピストによる「患者殺し」やクライエントによる「治療者殺し」がおこなわれる、緊迫した、そしてしんどい面接を通過して初めて、建設的な作業を引き起こすと述べる。こうした変容の局面においては、死が布置されており、それをやりきることで、却って創造的な過程が生み出されるという視点である。

とりわけ、樋口（1992）が、セラピストが「傷つけられた分だけ癒す」と述べるように、ヴィジョンの中でセラピスト自身が死に近づくほど、より大きな変容がもたらされることにつながるのではないだろうか。セラピストが象徴的に死に切る＝死を生きることで、そうした態度に支えられクライエントもこれまでのあり方の死を受け入れていく契機になると思われる。

このように、ヴィジョンを通しセラピストが象徴的な死を深く体験することは、逆説的にクライエントが新たな生を生きることにつながると考える。

文　献

樋口和彦 (1992) 臨床心理学辞典　培風館

井筒俊彦 (1985) 意味の深みへ　岩波書店

井筒俊彦 (1991) 意識と本質　岩波文庫

Jung，C．G.(1916)　Die transzendente Funktion, GW8, Walter-Verlag. 松代洋一訳 (1985) 超越機能　『創造する無意識』　朝日出版社

Jung，C．G.(1963) *Memories, Dreams, Reflettions.*　Collins and Routledge & Kegan Paul.

河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳 (1971,1972)　『ユング自伝Ⅰ・Ⅱ 思い出・夢・思想』みすず書房

Jung,C.G(1997)Visions：*Notes of the Seminar Given in 1930-1934*
(２vols.), Princeton University Press

角野善宏 (1998) 分裂病の心理療法　日本評論社

加藤清 (1996) 癒しの森　太洋社

河合隼雄 (1988a) 夢のなかのクライエント像 (Ⅰ)　山中康裕ら編　臨床的知の探求（下）創元社

河合隼雄 (1988b) 夢のなかのクライエント像 (Ⅱ)　山中康裕ら編　臨床的知の探求（下）創元社

河合隼雄 (1989) 生と死の接点　岩波書店

河合隼雄 (1994) ユング心理学と仏教　岩波書店

河合隼雄 (2000) 心理療法とイメージ　講座心理療法第３巻　岩波書店

河合俊雄 (2000) 心理臨床の理論　岩波書店

川嵜克哲 (2001) 心理療法において因果律が揺らぐことの意義　河合隼雄編　講座心理療法第４巻　岩波書店

織田尚生 (1998) 心理療法の想像力　誠信書房

織田尚生 (2000)　こころの傷つきと想像力　河合隼雄編　講座心理療法第３巻　岩波書店

Samuels.A，Shorter．B，Fred．P(1986) *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*
Routledge & Kegan Paul，London & Newyork　山中康裕監修　ユング心理学辞典　創元社

山川裕樹 (2008) 基盤としての身体性にたちかえること　心理臨床学研究，26(3)

（臨床実践指導学講座　博士後期課程３回生）

（受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日）

A Study of “Visions” of Therapists That Arise in the Process of Psychotherapy

KOYAMA Tomoaki

This study aims to examine what "visions" of therapists arise in the process of psychotherapy, and what clinical meanings it has, by presenting useful examples of clinical cases. The clinical importance of these "visions" has been studied by C.G. Jung, but it has not been actively examined until now. When do they arise in the process of clinical psychotherapy? They arrive the moment the dialectic movement between ego and unconscious arises and the clinical inner pressures reach their peak. At the same time, therapists experience the symbolic visions that transcend ambivalence and die symbolically. In consideration of this description, it can be seen that therapists can change dramatically by developing and accepting their own "visions", without disregarding the vision as meaningless or as a pathological element. "Visions" of therapists can be in deep relation to the transcendental function of the conception Jung detailed. It arises from something between opposite feelings, torn by the inner movements of confrontation. The clinical meaning of the "visions" of therapists is to help understand the internal world of clients and to keep these clients.